

## 英国病理学会派遣報告書

慶應義塾大学医学部 病理学教室

山ノ井 一裕

このたび、日本病理学会の日英交流事業の一環として、英国病理学会(Manchester pathology 2021: 6-8 July 2021)に参加させていただきました。2020年初頭に始まった、新型コロナウイルスの全世界的なパンデミックの遷延にて、昨年度の第32回 ESP Congress に引き続き、当学会も Web 開催となりました。例年とは異なる Web 開催での参加となり、国際交流委員会委員長の小田義直先生をはじめ、事務局のご担当の方々には、いろいろとご支援をいただきました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

学会参加については、オンライン上での演題登録に引き続き、Web 開催ならではの、事前に、Zoom を用いて、パワーポイントスライドを使ったビデオ録画を各自で行い、We Transfer というソフトを用いて、学会システムに録画画像を送りました。慣れない方法での画像送信にて、無事に送れたかどうかなどの不安がありましたが、送信した録画内容は先方で確認していただき、音声十分に聞き取れないなどの不具合がある場合は教えていただき、再度の提出が可能でした。英語での音声録音に際しては、より一層、はっきり、ゆっくりと発音して録音する必要性を学ばせていただきました。

学会開始日直前には、英国病理学会より、チーズやワインの入ったギフトセットをお送りいただきました

(右写真参照)。国内にいながらも、ほんの少し、異国気分を味わうことができた気がしました。



学会初日には、Dr. Solange より、Trainee などの若手病理医とのミーティングを開催いただき、大島先生と共に参加しました。Web 参加となるため、学会で人的交流を持つのがなかなか難しい中、15分ほどではありましたが、Dr. Solange の計らいもあり、お互いの興味や、どのような仕事をしているかなど、お互いに気さくに話すことができ、初めての学会参加に際しての緊張を少し解いてくれるミーティングになりました。

学会2日目に、Oral Free Papers - Gastrointestinal Pathology のセッションにおいて、諸臓器における、腫瘍細胞の産生する幽門腺型粘液の糖鎖修飾の消失と、悪性度の相関についての研究内容を発表いたしました。当日は、発表時間に Zoom より Virtual Room にセッションの発表者全員が入室し、座長が各演者の紹介をした後で事前録画データが流され、最後に 20-30 分の Q&A セッションを行うという流れで行われました。発表は、司会の Prof. McMahon, Prof. Quirke の進行にて進められ、大島先生と私の発表に際しては日本病理学会から選出された演者であること、国際交流の一環としての発表であることを含めてお伝えいただきました。Web 開催のため、参加者からの活発な討論はなかなか難しい部分もあ

りましたが、司会の先生からは、胃癌の発生母地として知られるヘリコバクターピロリ感染と糖鎖修飾の関連についての質問をいただき、大変意義深い発表となりました。

Web 上での学会参加による制約はありましたが、何より、移動することなく発表を聞くことができる点、興味ある発表は同時間帯に開催されていても視聴することができる点、学会終了後も長くライブ動画を視聴できる点(10月まで視聴可能)など、Web 開催ならではの利点も数多くあると考えられます。今回、学会での様々な人的交流や現地の文化を楽しむことはできませんでしたが、若手ミーティングへの招待など、英国病理学会の方々のできる限りの温かいおもてなしをいただけたことに、大変感謝しております。このパンデミックが終息し、自由に渡航できる時期になりましたら、ぜひ英国病理学会に再び参加し、今回できなかった交流を十分に果たせればと考えております。

末筆になりますが、これまで研究を指導していただいた諸先生方、また、このような貴重な経験をさせていただいた日本病理学会、英国病理学会の諸先生方に、大変感謝いたします。